OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『草わかば』から『有明集へ』 : 有明詩における愛をめぐって
Author(s)	山根, 賢吉
Citation	語文. 1961, 24, p. 43-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68553
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『草わかば』から『有明集へ』

――有明詩における愛をめぐって――

山根賢吉

をとめごころ
手にふれたまふことなかれ
うれしき君とおもへども
まだうらわかき野の花は
熱き情の日にたへじ

ゆめふれたまふことなかれ
いといともろきわが胸に
激浪たちて白珠の
涙くだかばつらからむ

ただふれたまふことなかれ
秘めてぞ清き戀なるを
もしかかる夜に罪やどる
星墜ちゆかばいかにせむ

これは有明の処女詩集『草わかば』（明治三十五年一月刊）に収められているもので、『草わかば』の中でも最も初期に属するものの一つである。[1] この純情のしらべは『若菜集』の直系であることを思わせ、その発想の点から見れば『若菜集』の「六人の処女」の流れをくむものと考えられる。しかしここにはあの「六人の処女」の青春そのもののような情熱は影をひそめ、むしろ内省的な傾向すら見うけられるように思う。「もしかかる夜に罪やどる星墜ちゆかばいかにせむ」の最後の二行はそうした傾向を示しているように思われる。この二行については何等かの典拠があろうかと思われるが、未だはっきりしたものを挙げ得ない。一つの臆測に過ぎないが『聖書』あたりから暗示されたものではなかろうか。有明自身もこの二行を難解と考えてか、『有明詩集』（大正十一年五月刊）においては「ああ、かかる夜を、かかる夜を、わかきいのちのいとどかなしき。」と改作している。こうなると意味は全くかわってくる。それはともあれ、この二行が現実の恋にともなうなげきとか、罪の意識とかを想像したものと解してさして誤りはなかろうかと思う。ところでここに「罪」の語が出てくるのは一応注意していいことではあるまいか。『若菜集』にも「罪」という語は見出される。一つは人妻との不義の恋をうたったもの（別離）であり、もう一つは

すぎこしゆめぢを
おもひみるに

こひこそつみなれ
　つみこそこひ

いのりもつとめも
　このつみゆゑ
たのしきそのへと
　われはゆかじ　（逃げ水）

と歌っている。有明研究の先学矢野峰人氏の『蒲原有明研究』によれば、昭和十六年五月二十六日、氏が直接有明から聞かれた話の中に「『若菜集』にある「夕となれば」などには讃美歌の影響が見えますね。」とある。氏は『若菜集』には「夕となれば」と題する詩がないので、「ゆふぐれしづかにゆめみんとて」で始まる「逃げ水」のことであろうと推定しておられる。[2] もしその推定にして誤りなしとすれば、有明は晩年に至るまで「逃げ水」一篇を記憶の片隅にとどめていたのであろう。[3] とすれば有明の「をとめごころ」と藤村の「逃げ水」とを対比させてみることもあながち無意味なこととも思われない。「逃げ水」は先にあげたものにつづいて

なつかしき君と
　てをたづさへ
くらき冥府までも
　かけりゆかん

と結んでいる。「こひこそつみ」とはっきり認識しつつも、なお且つその恋に命をかけようとするのである。一方有明の「をとめごころ」は罪への段階を回避して「清き恋」にとどまろうとする。

『草わかば』一巻に収められた恋愛詩は、一言もって云えばこの「清き恋」をうたったものである。その「清き恋」はあるいは異性への憧憬（君やわれや）となり、あるいはロセッティの影響[4]のもとに天上への思慕（ゆふづつ）ともなった。それは藤村がいみじくも[5]云ったように「センシャスなるきらひ一点もなく」、またそれゆえに、本間久雄氏の評された如く「余りにも天上的」であり「淡々しく空霊的なもの」[6]であった。

次の『独絃哀歌』（明治三十六年五月刊）には『草わかば』の傾向を一層押し進めて、聖愛にまで至った作が見出される。その一つをあげよう。

頼るは愛よ――
争闘絶間なき世の海のほとり
をぐらき幕はおちぬ、いかにせむ。
潮は寂しく沈み、濤は暮れて
櫓の音今こそ朽ちめ、嗚呼わが日の
生命の栄よなやみよ逝き果つるや、
つひにはこの身の罪の浄めがたく
回憶しげき荊棘の途に下り、
常闇つきぬ苛責にやさまよふべき。

頼るは、頼るは愛よ、君によりて
僅かに過ぎ来し片野路、荒磯べの
はかなき生の旅人、幸やしばし
希望の瑞木彩生ふ蔭に入りき。
夢かは、現し狭霧のこの世去らば
かの空かがやききそふ君が光。

これは現世の苦悩からのがれて天上の愛に頼ろうとする意を述べたものと考えられる。一体、有明詩における「愛」は「恋」とは違った意味をもっているようである。すでにそれは『草わかば』の中に

『祈禱あげよ』と星の界の
少女の一人その聲よ
愛の泉のしたたりや　（ゆふづつ）

の一例が見られるが、『独絃哀歌』では、右に引いた「頼るは愛よ—一」のほか

盡きせぬ「愛」の花草讃めたたへて
聖菜園のつとめに獨りゆかむ。　（聖菜園）
さらば彼處、焔の愛のこころの故里へぞ。　（蓮華幻境）

頼るは、頼るは愛よ、君によりて
地なる愁を去らむ　（頼るは愛よ—二）
見よここ永世の脉精氣みちて
時劫のすすみ老いせぬ愛の常かげ　（頼るは愛よ—二）
涙や、しほや—さはあれ高き愛の
涓滴それぞれと汝もたのみけむか。　（頼るは愛よ—三）

などの例が示しているように、それは尽きせず老いぬ天上のものである。この絶対者への讃仰こそ『独絃哀歌』の主調をなすものである。それはすでに先学によって指摘されているようにロセッティに負うところ大なるものがあろう[7]。とともに『草わかば』の「清き恋」の展開でもあろう。ただ一つここで見落されてならないのは、先にあげた「頼るは愛よ—一」の前節に見られる「つひにはこの身の罪の浄めがたく」の一句である。これを恋愛にともなう罪と限定することは出来ないが、わが身にひそむ罪を意識していることは事実である。

更に『独絃哀歌』における地上の恋を眺めてみよう。

別　離
別離といふに微笑む君があまひ
わかるるせめての際にそは何ゆゑ。
にほへる面わの罪か、世も、ねがひも、
希望も、かつてかがやくその光に、
眼のいろ澄める深淵その流に、
華やぐ聲ねのあやに、——かつて頼る
わが身のその幸限りあらざりしを、
ああなど君があまひに罪あるべき。

白日薔薇の花に射かへすとき
亂るる影さへもなく紅なる
色こそ君が面わに照り映ゆらめ。
げにはた常住のあまひや、嫉き花の
榮あるたはぶれとしもおもひ消して、
さらば戀の花園、さらばよ君。

別離に際してひときわ鮮やかに目を射る女人の微笑。岡崎義恵氏は「白日薔薇の花」以下三行を引いて「別離に臨む恋愛の輝きを描いて」「燦爛たる官能の美を現出せしめている[8]。」と述べておられるが、この官能美に対し「罪か」「など罪あるべき」のつぶやきはまた興味ある一事実ではなかろうか[9]。

第三詩集『春鳥集』（明治三十八年七月刊）は『独絃哀歌』に見られた天上への憧憬は残照をとどめるに過ぎず（例えば「静かにさめ

したましひの」「君にささぐ」等)、地上の官能美が中心となり

艶なる夜の黒髪は
月にきえぎえうつろひぬ、
香に洩れて沈丁花、
なほ、秘めつつむ花のふえ。

の如く官能交錯の手法をもってあえかの美を歌いあげる。名作「日のおちぼ」は『春鳥集』冒頭の一篇であるが、それは本間氏の指摘されたように刹那尊重の思想を歌ったものである。[10] 曾て『独絃哀歌』において高らかに歌われたとこしえの愛の思想はここにおいて当然動揺せざるを得ないであろう。

身肉愛をさへぎる白埴とか、
遺骸をば送りし『愛』は涙の友なり、　(繋縛)
いつける愛の金堂ここに壊え　(楽しや、さあれ)
　(沙門『不浄』)

これが『春鳥集』における「愛」の用例のすべてである。誠に愛の崩壊を象徴的に語っていると云うべきであろう。右に一部を引いた「繋縛」一篇をあげてみよう。

繋縛人を責むとか、黒鐵をも
黄金と耀やかしなば、その鎖に、
かの天走る宮路の星のごとく、
つながれ行きてぞ妙音世をばふるふ。
身肉愛をさへぎる白埴とか、
ああ、また罪の芽やどす汚穢か、そは——
清きを、わかき熱きを盛りなす時、
靈の手これ將た讃むる日の高杯。
かかる世、かかる身をこそ、われ等二人
再び保ちがたしと楽しむなれ。
大華生羽たちまち肩よりぬき、
まことや、君がかへたる口づけには
岩根に凝りて埋みしわれ玉髄。
光明にいつしか融けて流れ出でぬ。

この詩に述べられている「繋縛」とはいかなるものであろうか。それは「身肉愛をさへぎる白埴とか、ああ、また罪の芽やどす汚穢か」と云っているように、本能的なものを意味しているように思う。しかしその本能的なものにも霊的なものの宿る時がある。作者は前節においてそう云おうとするのであろう。『独絃哀歌』の「頼るは愛よ——」にあらわれていた「罪」はここではかなり明確な形をとっている。即ち本能的なものの中に「罪」を認めているのである。後節の「かかる世、かかる身をこそ、われ等二人、再び保ちがたしと楽しむなれ」には刹那尊重の思想が見られるであろうし、「大華生羽」以下には未だ聖愛の面影がただよっていよう。誠に「繋縛」一篇は以上の点において『春鳥集』の位置を暗示しているかのように思われる。

次に同じくソネット「沙門『不浄』」についていささか考察を加えてみよう。

『おもひ』は經つや荊棘の路を、今し
乾ける土に埋れてめしひぬれど、
ただ聞く、凶の沼水欲けかたぶき、
をぐらきまむしの谿間たぎちゆきて
ひしめき溢るるさやぎ、——將また聞く、
あだ人きはへる夜の森かげより

簪の火枝啄み滅し去ると
舞ひ來し天の眞鳥の悲しきこゑ。

かくしも聞くと、わが身にあやし『おもひ』
やどりて眠り、埋れて耳たつれば、
惱みてわれは扉を守り沙門『不淨』
いつける愛の金堂ここに壞え、
ねたみや、悔や、丹の雨、瑠璃のあらし、
忽ち燃えそふ戀のこれや阿蘭若。

岡崎氏は右の詩について

前半は恋愛にともなう罪業を様々の恐ろしい風物で象徴したもので、この罪を滅しようとする天の力も如何ともすることができない状態を諷示したものらしく、後半はこの罪の自覚から、恋愛の寺院を守る不浄の沙門の信仰の対象は崩壊することをあらわし、恋愛の華麗にして惨澹たる末期の姿を象徴しているようである。(11)

と言っておられる。前半を「恋愛にともなう罪業」の象徴と見られたのは後半との関係を重視されたためであろうが、むしろ前半は一応後半と切りはなして、醜悪な自己の「おもひ」を象徴したものと考えてはどうであろうか。後半についての氏のお考えはいささか的を外れているようである。と云うのはすでに述べた如く、有明詩に於ける「愛」は「恋」と同義語ではないからである。右の詩に於ても「愛の金堂」はやはり精神的天上的なものであると思うのである。だからこそ「愛の金堂」が「壊え」て「恋の」「阿蘭若」が現出するのである。とすれば醜く汚れた「おもひ」ゆえに、自らは「不浄」と化して眼前には精神的愛の世界は崩壊し、苦悩に満ちた官能的な恋の世界が現われると云うのであろう。見解の相違はあるが、この作に罪業感が漂っていると見る点については氏の説に賛意を表したいと思う。

第四詩集『有明集』(明治四十一年一月刊)になると罪の意識は一層明白になってくる。

懼しき「疑」は、噫、自の身にこそ宿れ
他し人責めも來なくに空しかる影の戯わざ
こは何ぞ、「畏怖」の黨群れ寄せて我を圍むか。
脅す仮装ひに松明の焔つづきぬ。

聖麻利亜、かくも弱かる罪人に信の潮の
甦り、かつめぐり来て、「肉」の渚にあふれ、
俯伏に干潟をわぶる貝の葉の空の我も
敷浪の法喜傳へて御恵に何日かは遇はむ。

さもあれや、わが「性欲」の里正は窺ひ寄りて、
禁制の外法の者と執ねくも罵り逼り、
ひた強いに蹈繪の型を蹈めよとぞ、あな淺ましや、
我ならで叫びぬ、『神よ此身をば磔にも架けね』と

(苦悩)

こゝでは性欲を罪とする考えがはっきりうち出されている。『有明集』以前には、右の詩に表現されたような「肉」とか「性欲」とか、それに類する語を殆ど見出すことが出来ない。わずかに『春鳥集』の前掲「繋縛」の中に「身肉愛をさへぎる白埴とか」、及び同集の「姫が曲」に「愛慾」の語を見出すのみである。ところが『有明

集』では

わが靈は、あな、朽つる肉の香に。　（不安）
肉村の懺悔の夢に　朽ち入るは梵音どよむ　西天の涅槃の教
（滅の香）

彼方、道なき通の奥、生あるものの胤を食む　蛇纏ふ「肉」の
臙。　（惡の祕所）
朱の斑の痛と、はたや　愛欲の甘き疲れの　紫の汚染とまじら
ふ　（滅の香）
愛欲の蔓まつはれる　窓の夜あけを梵音に　秘密の鸚鵡警めぬ
（われ迷ふ）

薄ぐもる夏の日なかは　愛欲の念にうるみ
眼ざし　むかひゐてこころぞ惱む。　（夏の歌）
底もゆるをみなの

の如く頻出する。一方「愛」は

徒然の慰さめに愛の一曲
奏でむとためらふ思ひのひまを
愛の、欣求の、信の顆。　（信樂）　（癡夢）

の二語しか見出されず、しかも前者はすぐ後に「忍び寄る影あり」と云い、後者はその前行に「苦の緒の一聯」と歌っている。何れも暗い苦惱の影を背負った「愛」である。しかしなお且つそれが天上のものであることを右の「信樂」の一句は語っているであろう。

絶対者の喪失はやがて対立を生む。曾て『春鳥集』の「繫縛」に於て

身肉愛をさへぎる白堵とか
に対して
靈の手これ將た讃むる日の高杯　（碑銘其四）

と対立らしきものを歌った有明は、『有明集』では

肉は、靈は
二つのちから、

生は、死はよ、
真砥の堅石、

研きいづれ、
摩尼の金剛。

あざれし肉
「神」の牲。

虛しき靈
「蝮」の智。

肉の肉を
われ今おぼゆ。

覺めよ、「人」は
靈の靈。

とはっきり霊肉の相克を歌っている。ここで云われている「靈」とは勿論自らの内の霊である。それは『有明集』以前に見かけられる自然の霊ではない。しかもその「靈」は官能美にいよ〳〵引きつけら

（以下42頁へつづく）